

# 撰集抄の玄奘説話

森瀬代士枝

一

『撰集抄』に玄奘の名の見えるのは、巻一第八話、巻四第八話、巻六第一話、巻七第十五話、の四話である。これらの話に於ける玄奘のとりあげ方には、共通の特色があるように思われる。<sup>〔注〕</sup>それは

- (1) 玄奘は、『撰集抄』中の他の登場人物に比して、より一層尊ばれている。
- (2) 玄奘は、いずれの話に於ても、中心登場人物ではなく、『撰集抄』筆者がその中心人物について評論

〔表一〕 玄奘に關する説話

したり感想を述べたりする部分で、ひきあいに出される。

という二点である。(同様の特色をもって、『撰集抄』にとりあげられているのは、他に玄奘の例がある)『撰集抄』中の玄奘は、他の人物にかこつけてひきあいに出される程度の断片的な描かれ方にもかかわらず、一話の中心話題となる人物よりも一層尊ぶべき人物となっている。このように特色あるとりあげ方をされている『撰集抄』中の玄奘説話は、どのような説話を依拠としているか、考察したい。

中心話題	<p>巻一第八 行賀僧都之事</p> <p>行賀僧都、惡しき瘡ある法師に、耳を切つて與えた所、夢に十一面觀音あらわれて、その耳を返される。</p>	<p>卷四第八 慶祚大阿闍梨、蒙宇佐神託、事</p> <p>慶祚大阿闍梨、渡天の企を、宇佐宮の御託宣によつて、中止する。</p>	<p>卷六第一 (玄奘之事)</p> <p>眞如親王、渡天すとて獅子州にて、むらがる虎にあひて、それに食わる。</p>	<p>卷七第十五 伊勢國ノ尼往生、事</p> <p>伊勢の國に庵むすびし尼、(女ながら)本意のごとく往生す。</p>
------	---	--	---	--

玄奘に關する説話

E	D	C	B	A
		ある山中にして、慈悲をもつて、臭くけがらはしき病人を、頭より足のあなうらにいたるまで、ねぶりと給ひて、『心經』を授けさせ給へる		おろ／＼もろこしのむかし、三藏渡天し給ひけるに、
葱嶺も昔に似ず、	大乗流布の國はわづかに十五ヶ國	中天竺の佛法は跡もなし。祇園精舍は虎狼のふしど、茂り、白鷺池は草のみ茂	あまねく百三十ヶ國を経廻らせ給へりけるに、	むかし、玄奘三藏の渡天し給ひて、
鶯のみ山は風はげしくて、ほがらかに照せる月の影もなく、拔提川は岸さびて、澄めるけしきもなく、御法説かせおはしましし所々も、虎狼野干のすみかとなりしありさま		祇園精舍はむなく礎のみのこり、白鷺池には水たえて草ふかく、凡下乗の卒都婆はかたむきて、文字きりくち墨かれて、其跡見えざりければ、流砂葱嶺の峻難をし、ぎりはるばる渡りましませる甲斐もなく、こしにて遠く思ひやりたりしは、佛法の末に成ぬのたまひて、且は釋尊在世のいしへ事を難き、且は釋尊在世のいしへ事をあはざる事を悲しみ給ひにきと、もとををしほりかね給ひにきと、	(佛法を傳へんとて) ひろく百三十箇國に遊行して、あまねく聖教を解し給ひけるに、あ	むかし、玄奘三藏、佛法をひろめて、むがために、天竺へ渡りたまひて、
				玄奘三藏渡天のそのかみ、

G	F
とは承はる。	
とこそ、うけたまはり侍る。	
ほの傳へきくに、理とおぼえて涙をおとしき。	
と侍り。	海賊の盜難にあひ給へる時、かれを拜みて、「豈、電光朝露の身の爲に、阿僧祇耶長夜の苦種を植ゑんや」とのたまひし時、海賊、さとりをひらき侍りて、かしらをおろして、奉仕したてまつる

## 二

まず『撰集抄』中の玄奘説話を内容の整理をしつつ抜き書きし、表Ⅰにまとめた。(注3)これによって、AからGまで説話を七区分し、その各々について、関係する資料を以下に引用する。

### A 区分

- 『慈恩伝』(巻一)(注3)
- (1) 乃誓。遊西方以問所惑。并取十七地論以釋衆疑。
  - (2) 爲求法故去。
  - (3) 欲西求法。
- 『三宝絵』(中序)(注4)
- (1) もろこしの貞觀三年に玄奘三藏の天竺にゆきめぐりし時に
- 『今昔物語集』(注5)
- (1) 唐ノ玄奘三藏ノ天竺ニ渡テ…(卷三第八)
  - (2) 天竺ニ渡リ給問…(卷六第六)

### B 区分

『西域記』(注11)

- (3) 震旦ニ玄奘法師ト云フ人有テ、天竺ニ渡テ正教ヲ傳テ本國ニ返來ルト。(卷十一第四)
- 『打聞集』(注6)
- (1) 昔、玄奘三藏傳べき佛法ありとて天竺に渡、所々に往て、佛法を學び往く。
- 『宝物集』(注7)(卷第二)
- (1) 昔玄奘三藏ト云人。佛法東漸ノタメニ。(中略)五天竺ヲ廻リテアリキ給ヒシニ。
- 『宇治拾遺物語』(注8)(一二二話)
- (1) 玄奘三藏天竺に渡給たりける日記に……
- 『沙石集』(注9)(卷六第十話)
- (1) 玄奘三藏天竺ニ渡テ、佛法ヲ漢土ニ流布ノ志アリケルニ
- 『三国伝記』(注10)(卷第二十三)
- (1) ……玄奘三藏唐ノ貞觀年中ニ歳廿七歳ニテ爲「弘法」天竺ニ渡ルニ……

(1) 親踐者一百一十國。傳聞者二十八國。

『慈恩伝』(第一)

(1) 耳目見聞百三十國、

『仏祖統紀』(注12) (卷二十九)

(1) 所歴百三十國。

『法苑珠林』(注13)

(1) 凡經二百五十餘國。

『宝物集』(卷第一)

(1) 耳目ノ見聞スル事百三十餘國

『三國伝記』(卷二第廿三)

(1) 一百卅亡國ヲ修行シ：

## C 区分

『慈恩伝』(卷第一)

(1) 初法師在蜀見一病人一身瘡臭穢衣服破汚。慙將向

寺施與衣飲食之直一病者慚愧乃授法師此經

『神僧伝』(注14) (卷第六) 『太平広記』(卷九十二)

(1) 行至闕賓國(中略) 見一老僧。頭面瘡痍、身體膿血

牀上獨座、莫知由來一裝乃禮拜動求、僧口授多心經

一卷

『今昔物語集』(卷六第六)

(1) 此ノ心經ハ、法師、天竺ニ渡リ給フ間ニ、道ニシテ傳ヘ

得給ヘル所ノ經也。遙ニ深キ山ノ中ヲ通ル間、人ノ跡絶タル

所有リ、鳥獸猶シ不走来ズ。而ル間、臭香俄ニ出来ル、難  
堪キ事无限シ。鼻ヲ塞テ退クニ、此ノ香ノ奇特ナルヲ漸ク  
寄テ見レバ、草木モ枯レ、鳥獸モ不來ズ。強ニ寄テ見レバ  
一人ノ死セル人有リ。「此レガ香也ケリト」思フ程ニ、善  
ク見レバ、動ク様ニ見ユ。「早フ、生タル者也ケリト」見  
成シテ、「事ノ有様ヲ問ハム」ト思テ、寄テ問テ宣ハク  
「汝ハ何人ノ何ナル病有テカクテハ臥シタルゾ」ト。病者  
答テ云ク、「我レハ此レ、女人也。身ニ瘡ノ病有テ、首ヨ  
リ跌ニ至ルマデ陣无クシテ身爛レ鯉テ臭キ事ノ難堪キニ依  
テ、我ガ父母モ不知ズシテカク深キ山ニ奔タル也。然而  
モ、命ハ限リ有リケレバ、不死畢ズシテ有ル也」ト。

法師、此ノ事ヲ聞テ哀ビノ心深クシテ、亦、問給ハク、  
「汝ガ、家ニ有リケム時此病ヲ受テ、薬ヲ教フル人ハ无カ  
リキヤ否ヤ」ト。病者答テ云ク、「我レ、家ニ有テ此ノ病  
ヲ治セシニ、不叶ザリキ。但シ、醫師有テ云ク。「首ヨリ跌  
ニ至ルマデ膿汁ヲ吸ヒ舐レラバ、即チ愈サム」ト云ヒキ。  
然面モ、臭キ事難堪キニ依テ、近付ク人无シ。何況ヤ、吸  
ヒ舐ル事有ラムヤ」ト。法師、此レヲ聞テ涙ヲ流シテ宣ハ  
ク、「汝ガ身ハ既ニ不淨ニ成リニタリ。我ガ身忽ニ不淨ニ

非ズト云ヘドモ、思ヘバ亦、不淨也。然レバ、同ジ不淨ヲ以テ自カラ淨シト思ヒ、他ゾ穢マム、極テ愚也。然レバ、我レ、汝ガ身ヲ吸ヒ舐テ汝ガ病ヲ救ハム」ト。病者、此レヲ聞テ排リ善テ身ヲ任ス。

其ノ時ニ、法師、寄テ、病メル者ノ暫ノ程ヲ先ヅ舐リ給フ。身ノ膚泥ノ如シ、臭キ事譬ヘム方无シ、大腸返テ氣可絶シ。然面モ悲ビノ心深クシテ臭キ香モ不思議ズ、膿タル所ヲバ、其ノ膿汁ヲ吸テ吐キ奔ツ。如此ク類ノ下ヨリ醫ノ程マデ舐リ下シ給フニ、舌ノ跡、例ノ膚ニ成リ持行テ愈ユ。法師、喜ビノ心无限シ。其ノ時ニ、俄ニ微妙ノ檀・沈水香等ノ如クナル香出來ス、亦、日ノ始テ出ヅルガ如クナル光有。法師驚キ性テ退テ見レバ、此ノ病メル人忽變ジテ觀自在菩薩ト成リ給ヒス。法師、膝ヲ地ニ着ケテ掌ヲ合セテ向ヒ奉ルニ、菩薩、即チ起居給テ、法師ニ告テ宣ハク、「汝チ實ノ情淨・質直ノ聖人也ケリ。汝ガ心ヲ試ムガ爲ニ、我レ病メル人ノ形ヲ現セリ。汝チ極テ貴シ。然レバ、我ガ持ツ所ノ經有り、速ニ汝ニ可傳シ。此レヲ受ニテ二世ニ弘メテ衆生ヲ導ケ」ト。菩薩、經ヲ授ケ給フ事畢テ、搖消ッ様ニ失給ヌ。

## 『打聞集』

(1) 此心經は三藏の天竺より渡る間、道にて傳へたまつる所經也。此傳へたまつる様は、山ふところをすぎ往間、人はるかにたえたる所あり。そこをすぎ往程に、えもいはず嗅香す。漸々よりて見れば、草かれ、れいならぬ所あり。鳥獸のだに見ず。嗅のたへがたければ、鼻をふたぎて、あやしさに強よりてみれば、一人死人あり。「これが香なりけり」と見程に、みじろぐ様にす「生たる物なりけり」とみなして、事のありさまを問、「汝は何人。いかなる事ありて、かうては臥たるぞ。病人と答て云、「我は女なり。しみさうといふかさの、かうべよりあなうらにまで出たる也。嗅さのかくえもいはぬにたへで、父母もしわびて、かくふかき山に捨てゝ去にたるなり。かゝれども、壽は限ありければ、かゝるいみじき病をすれども死もやらであるなり。」三藏此事を聞て、悲て「さてもいかにしてか此病はやむべき。薬云人はなかりしか。」やまひ人答云、「醫師の申しゝは、首より足うらまでうみしをすひねぶれば、速に平癒なむと申しゝかども、嗅にたへてよる人もなければ、かくて有なり。」といふを聞て、三藏目よりなみだをながして云、「汝が身は不淨に成れたり。我が身も又不淨身なり。同身を以て他をきたなぐべきにあらず。我汝が身をすひねぶりて、汝が病を救」と云をきゝて、病人と手を摩をがみて身を任す。聖よりて胸の程を先ねぶる。身のさま泥の如し。嗅こと響べき方なし。あたり

の本草さへ皆かれにたり。すふ間、腹わた返て逆れども悲の心深きまゝに、嘯をほえぬまでかなしかりければ、ねぶる。舌のあと例の膚に成て、かはきもていく。しるづきうみたる所は其うみしるをすひてはき捨。如く是する程に頸下（した）より暑もとまで嘔り下程に只陰に陰以いく。その程に、えもいは□かうばしき香出きぬ。又見れば朝日のさしたるが如くなる光出きぬ。驚てあやしびて見ば、此病人えもいはず貴き觀世菩薩成ぬ。驚悲で、のきて跪典叉手侍、此并起居給て、□たまはく「汝は眞の潔聖なりけり。其心を願がために病人形を見るなり。汝極て貴し。しかあれば我持心經、汝に傳べし。陰に此をうけて、はるかに世に傳て衆生を導びけ。」とて傳へ得たてまつれる所の心經是也。

### 『三国伝記』（卷二第廿三）

(1) 趣千里ノ長途。終ニ到ニ廣遠ノ野原ニ爰ニ死タル人有リ。此ノ鼻ハ其ノ邊ノ草木モ皆枯モヘタリ。鼻ヲ塞キテ近付テ見ルニレ之未レ死者也何ナ。ル物ソト問ヘハ。漢民瘡ト云病ヲ受テ。父母モ鼻ヲ厭テ生被レ捨候也ト云云。玄奘哀ト思ヒ何力藥ナルト問玉フニ。易キ藥有レ共親類父母モ不トレ與云フ。何ソト問ニ人ノ舐力第一ノ藥ニテ有ル也。其ノ外ニハ藥無シト云。三藏聞レ之思ハク。不淨ハ誰カ不レ備。以ニ大慈悲心舐ント思ヒ給ヒ。彼カ五體身分針ノ指計モ不レ損所無之。然レトモ目ヲ塞テ胸ノ程ヨリ舐玉ヘハ。鼻難レ堪ケレ共。深重ノ慈悲ヲ以テ漸ク舐リ給フニ。病人忽ニ金色ノ觀世音

ト成テ起居テ云ク。汝ハ眞ノ聖人也。實ニハ汝カ心ヲ知ラントテ。我反ニ病人一タル也。我甚深ノ法ヲ持。是ヲ傳テ一切衆生ヲ利益シ玉ヘトテ。則授ク。般若心經是也。

### D 区分

『西域記』に見られる大乘仏教国は二十一箇国とのことである。（註五）但、『西域記』には、大乘流布国の数をまとめて述べた箇所を見出し得ず、又、調査した玄奘関係の文献中に、『撰集抄』のこの部分の典拠となる文章を見つけ得なかつた。

### E 区分

#### 『西域記』

- (1) 至三凌山。此則葱嶺北原。水多東流矣。山谷積雪春夏合凍。雖三時消泮。尋復結氷。經途險阻。寒風慘烈。多暴龍難凌。犯行人。由此路者。不得諸衣持。瓢大聲叫喚。微有違犯。災禍目覩。暴風奮發。風沙雨石。遇者喪沒。難以全生。（卷一）
- (2) 城南五六里有近多林。（中略）是給孤獨園。勝軍王大臣善施爲佛建精舍。昔爲伽藍。今已荒廢。室宇傾圯。唯餘故基。（卷六）
- (3) 宮城東北行十四五里至結栗陀羅矩吒山。（中略）接北山之陽。孤標特起。既棲鷲鳥。又類高臺。空翠相映。濃淡分色。…中路有二小窰堵波。一謂下乘。…一謂退凡。（卷九）

## 『慈恩伝』

- (1) 至<sup>二</sup>凌山<sup>一</sup>。即葱嶺北隅也。其山險峻峻極于天。自開闢已來水雪所<sup>レ</sup>聚。積而爲<sup>レ</sup>凌。春夏不<sup>レ</sup>解。凝沍汚漫與<sup>レ</sup>雲運屬。仰<sup>レ</sup>之皚然莫<sup>レ</sup>覩<sup>二</sup>其際<sup>一</sup>。其凌峯摧落橫<sup>二</sup>路側<sup>一</sup>者。或百尺。或廣數丈。由<sup>レ</sup>是蹊徑崎嶇登涉艱阻。加以風雪雜飛。雖<sup>二</sup>復屢重裘<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>免<sup>二</sup>寒戰<sup>一</sup>。將欲<sup>二</sup>眠食<sup>一</sup>。復無<sup>二</sup>燥處可<sup>レ</sup>停<sup>一</sup>。唯知<sup>二</sup>懸釜而炊<sup>一</sup>。席<sup>レ</sup>水糲。七日之後方如出<sup>レ</sup>山。徒侶之中殍凍死者十有<sup>二</sup>三四<sup>一</sup>。牛馬逾甚。(卷二)
- (2) 即給孤獨園也。昔爲<sup>二</sup>伽藍<sup>一</sup>。今已頽毀。(卷三)
- 『三寶絵』(中・序。)
- (1) 孤獨苑の昔の庭には室うせて僧もすまざりけり。
- 『発心集』(注16)
- (1) 靈鷲山のいにしへのこと、虎狼のすみかとなり、祇園精舎の古き砌は、僅かに礎ばかりこそは残りて侍るなり。
- 『平家物語』(注17)
- (1) 遠く天竺に佛跡をとぶらへば、昔佛の法を説給ひし竹林精舎・給孤獨園も、此比は狐狼野干の栖とな(ツ)て、礎のみや残らん。白鷺池には水たえて、草のみふかくしげれり。退梵下乗の卒都婆も苔のみむして傾ぬ。(卷二)
- (2) たるみ山・鷺浜な(ン)どいふ峨々たる嶮難をしのぎ、渺々たる平沙へぞ、おもむき給ふ。いつならはしの御事なれば、御足よりいづる血は沙をそめ、紅の袴は色をまし、白袴はすそ紅にぞなりにける。彼玄奘三藏の流沙・葱嶺を凌

がれけんくるしみも、是にはいかでかまざるべき。されどもそれは求法のためなれば。(卷八)

- (3) 天竺震旦のさかひは、流沙葱嶺といふ嶮難也。わたりがたくしてこえがたき道也。まず葱嶺といふ山あり。…次に流沙といふ川あり。ひるは溪風はげしくて、いさごとばして雨のごとし。夜るは天鬼走散て、火をともし事はしにたり。(中略)されば玄奘三藏も、かのさかひにして六度までのちをうしなひ、渡流のくるしみにくちしかども、次の受生にこそ法をばわたり給ひけれ。(卷十)

『太平記』(注18)(卷三十六)

- (1) 玄奘ノ大般若ヲ渡サントテ流沙ノ難ヲ凌シニハ様替リテ

## F 区分

『統高僧伝』(注19)(卷四)

- (1) 又東南行二千餘里經<sup>二</sup>于四國<sup>一</sup>。順<sup>二</sup>苑伽河側<sup>一</sup>。忽被<sup>二</sup>秋賊<sup>一</sup>須<sup>レ</sup>人祭<sup>二</sup>天<sup>一</sup>。同舟八十許人悉被<sup>二</sup>執縛<sup>一</sup>。唯選<sup>二</sup>奘公<sup>一</sup>堪<sup>二</sup>充<sup>一</sup>天食。因結<sup>二</sup>壇河上<sup>一</sup>。置<sup>二</sup>奘壇中<sup>一</sup>。初便生響將<sup>レ</sup>加<sup>二</sup>鼎鑊<sup>一</sup>。當<sup>二</sup>斯時<sup>一</sup>也取<sup>レ</sup>救無<sup>レ</sup>緣。注<sup>二</sup>想慈尊<sup>一</sup>。如來及東夏住持三寶。私發<sup>レ</sup>誓曰。餘運未<sup>レ</sup>絕會蒙<sup>二</sup>放免<sup>一</sup>。必其無<sup>レ</sup>遇命也如何。同舟一時悲啼號哭。忽患風四起。賊船而覆沒。飛<sup>レ</sup>沙折<sup>レ</sup>木咸懷<sup>二</sup>恐怖<sup>一</sup>。諸人又告<sup>レ</sup>賊曰。此人可<sup>レ</sup>愍。不辭<sup>二</sup>危難<sup>一</sup>。專<sup>レ</sup>心爲<sup>レ</sup>法。利<sup>二</sup>益邊陲<sup>一</sup>。君若殺<sup>レ</sup>之罪莫<sup>レ</sup>大也。寧殺<sup>二</sup>我等<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>損<sup>レ</sup>他。衆賊聞<sup>レ</sup>之投<sup>レ</sup>刃禮愧受<sup>レ</sup>戒悔<sup>レ</sup>失。

## 『今昔物語集』(卷六第六)

(1) 而ル間ニ、忽ニ黒キ風四方ヨリ來テ諸ノ木ヲ折り、河ノ流レ浪高クシテ船漂フ。賊等、此レヲ見テ大ニ驚テ、同船ノ人ニ問テ云ク、：「答テ云ク、：「賊、此レヲ聞テ悔ル心有テ：禮拜ス。法師ノ宣ハク「煞盜ノ業ハ无間ノ苦ヲ可受シ。何ゾ、朝ノ露ノ如クナル身ヲ以、阿僧祇劫ノ業ヲ造ラム」。賊等、此レヲ聞テ頭ヲ叩テ悔ヒ悲テ云ク「我等、今日ヨリ此ノ惡行斷。願クハ、師、此レヲ證明シ給ヘ」ト、奪ヘル所ノ衣財ヲ皆返シテ、五戒ヲ受ク。

## 『沙石集』(注20)(卷六第十)

(1) 其間ニ、俄ニ大雨・大風・雷電・地振ナンド、ヲビタ、シカリケレバ、神ノウケ給ハヌニコソトテ、諸人大キニ恐レヲノ、キ、三藏ハ定中ナンバ、コレヲモ不ニ知給一定ヨリ起テ、「今ハトク」トノ給ヘバ、諸人恐入テ、此過ヲ懺悔シケリ。其時三藏、法ヲ説キ給フ詞ニ「何ゾ雷光朝露ノ小時ノ此身ノ爲ニ、阿僧祇劫ノ長時ノ因ヲ造。：」ト。斯ル詞ノスヘナレバニヤ、此強盜モ發心シケリ。

## G 区分

短い部分ではあるが、いずれも、玄奘説話を伝聞の形で書き記したと述べている事を、ここでは注目しておきたい。

## 三

### 1

以上で『撰集抄』に出ている玄奘説話と、他書に見られる玄奘説話とを抜き書きすることができた。

そこで、『西域記』『慈恩伝』等の中国の文献と『撰集抄』の説話とを読みくらべてみよう。『撰集抄』A区分の記事について『慈恩伝』の照応部分を見ると、玄奘渡天の目的が「遊西方以問所惑」の如く具体的に述べられており、「求法」の語もって説明されている。しかし『三宝絵』以下日本の諸説話集では、渡天の目的は特に記さない場合がある。また、記してはあっても、「求法」の語で説明される事は無い。『撰集抄』もまた、日本の諸説話集と同様である。

次に『撰集抄』C区分をとりあげよう。『撰集抄』では、玄奘が臭くけがらはしき病人をねぶって助けようとするところがあるが、『慈恩伝』『神僧伝』『太平広記』等の書物には、この記述は無い。しかし、日本の『今昔物語集』『打聞集』『三国伝記』には共通に見られる記事である。

また、E区分に関しては、『西域記』『慈恩伝』の文章よりも『平家物語』『太平記』の文章の方が、はるかに



『撰集抄』に似通った文章であると認められるだろう。

では、『撰集抄』F区分についてはどうだろう。『続高僧伝』には『撰集抄』にある玄奘の言葉「電光朝露の身の為に、阿僧祇耶長夜の苦種を植ゑんや」の語は見えない。しかし『今昔物語集』『沙石集』には、小異はあるが酷似する表現が存する。

このように見てくると、依拠資料を見出し得なかった『撰集抄』D区分について、次のように考え得るのではなからうか『西域記』中の大乗流布国は二十一ヶ国との事で『撰集抄』の記事と必ずしも相違するとは言いがたく、『撰集抄』筆者は『西域記』を依拠資料としたかに思われる。しかし、今まで見てきたとおり『撰集抄』A、C、E、F、各区分の記事が『慈恩伝』等中国の文献よりも『今昔物語集』以下日本の諸説話集に近似している点から考えて、日本の玄奘説話の内に『撰集抄』G区分のこの事柄も存したのかもしれない。

同様に『撰集抄』B区分を見るならば「百三十国」という国数は『慈恩伝』にも見られるところであるが『三國伝記』中にも存する数である点から考えると、D区分と同じく、日本での玄奘説話にも存した語句と認めることができる。

さて、このように『撰集抄』A—F区分と、それに照

応する中国の文献とを読みくらべてみると、『撰集抄』の玄奘説話は『慈恩伝』『西域記』等の中国の書物を、必ずしも直接の依拠資料とはしていないように考えられるのである。

## 2

それでは『撰集抄』の玄奘説話は、日本の説話集のどれかに根拠となる資料が存するだろうか。

まず気付くのは、『撰集抄』A—F区分すべてに照応する記事をもつ説話集は、今見出し得ない事である。

そこで、手がかりの多いと思われる『撰集抄』C区分から考察を始めよう。この部分に照応する記事をもち、『撰集抄』に先行する説話集は『今昔物語集』と『打聞集』とである。『撰集抄』C区分は『今昔物語集』あるいは『打聞集』を短くまとめた、というような体裁をとっている。どちらの記事を短くまとめたかについては、判断の根拠を『撰集抄』C区分からは見出し得ない。ところで、中島悦次氏によれば、『打聞集』成立の「当時日本種の説話ばかりではなく、外国の多くの説話が書物によってでなく、口伝へによって、かなり説話の中心点・筋の運び方が、固定するまで語りつがれ親しまれてゐたらしいこと。」が指摘されている。(注2)この事から『撰集抄』C区分はあるいは、ここで言われている「口伝へ」

を要約したとも考えられる。

次に、F区分について考察する。この部分に照応する『今昔物語集』は『西域記』に基く説話である。ところで『西域記』と『今昔物語集』との間に何らかの中間媒体を想定しなければならない事は、既に指摘されている所である。<sup>(註28)</sup>従って『撰集抄』F区分は『今昔物語集』を短くまとめたと考ええることもできるし、また『今昔物語集』と『西域記』との間の中間媒体を短くまとめたとも考え得るであろう。

さて『撰集抄』E区分に目を移そう。『撰集抄』にはるかに先行する『三宝総』に、いく分E区分に似た表現がある事に気付く。しかし、より一層似通う文章が『平家物語』に見場せるのである。『平家物語』の文章(E区分『平家物語』(1)(2)(3)は玄奘の事を言いたいために書かれたのではなく、それぞれ、別の事柄を言い出すためにひきあいに出された文章であって、この事は『撰集抄』における玄奘説話の採られ方と似ている。ところで、『撰集抄』の成立を一二五〇年頃と考えるならば『平家物語』の成立は、ほぼ、同時代か、あるいはいく分早い程度であると一般に考えられる。すると『平家物語』『撰集抄』の成立当時、この両者が採録したと類似した語句と内容を持つ玄奘説話が流布していた事を想定できな

いだろうか。ここで、C、F区分で『今昔物語集』に先行する口承を想定し得た事と考え合わせると、『撰集抄』の時代、C、E、F区分を含む玄奘説話が口承されていたと考える事が可能であろう。この事は『撰集抄』G区分に「承る」「ほの伝へきく」とあることから、確かめられよう。

以上のような考察から『撰集抄』当時口承されていた一連の玄奘説話の存在を想定する可能性を追求してみた。この一連の説話は、『撰集抄』A—F区分のすべての記事に類似した内容を持っていた事であろう。また、この一連の説話は『今昔物語集』や『打聞集』の母体となった口承が、『撰集抄』E区分に相当する内容を含むなどして、変化成長したものだという事も言い得ると思う。このような一連の玄奘説話が口承されていて、玄奘に関する一定の知識が流布していたからこそ、冒頭で述べたような『撰集抄』に於ける玄奘説話の特殊な現れ方が可能だったのではなからうか。同様に『平家物語』に於ける玄奘説話の採録のされ方をも、可能にしたと考えられる。

私は、『撰集抄』の玄奘説話の依拠として、当時口承されていたと思われる一連の玄奘説話を想定するものである。

## 注

- ① 卷六第一話については、問題が存する。ここでの玄奘説話は、独立した一話とも考えられ、この場合、玄奘は話の副人物ではなく、主要登場人物と考えられる。しかし表1で示した如く、眞如親王渡天説話の「マクラ」として玄奘説話を考えるならば、『撰集抄』中の他の玄奘説話と同じ特色をあてはめる事が出来る。
- ② 関係する資料の探索にあたり、『日本説話文学索引』岩波版『日本古典文学大系』及び『索引』『打聞集研究と本文』（『打聞集』を読む會）『打聞集』（中島悦次）『廣文庫』（物集高見）等を参照した。『撰集抄』本文は岩波文庫本を用いた。
- ③ 『大唐大慈恩寺三藏法師傳』以下『慈恩伝』と略称す。本文として『大正新脩大藏經』を用いた。
- ④ 『三寶繪略註』（山田孝雄）の本文を用いた。
- ⑤ 日本古典大系本『今昔物語集』を本文に用いた。
- ⑥ 本文は『打聞集』（中島悦次）。
- ⑦ 本文は『大日本佛教全書』。
- ⑧ 日本古典大系本。
- ⑨ 日本古典大系本。
- ⑩ 『大日本佛教全書』
- ⑪ 『大唐西域記』以下『西域記』と略称。本文は『大正新脩大藏經』。
- ⑫ 本文は『大正新脩大藏經』。
- ⑬ 同じく『大正新脩大藏經』。
- ⑭ 『神僧傳』『太平廣記』共に『大正新脩大藏經』を本文とする。
- ⑮ 中国古典文学大系『大唐西域記』（水谷真成訳）の補注三『西域記』に見える大・小乗の分布による。
- ⑯ 本文は角川文庫『発心集』。
- ⑰ 大系本を本文に用いた。
- ⑱ 本文は大系本。
- ⑲ 本文は『大正新脩大藏經』
- ⑳ 本文は大系本。
- ㉑ 『打聞集』（中島悦次 解説）『本書の成立』
- ㉒ 『国語と国文学』昭和五十年十二月号。『大唐西域記と今昔物語集の間』（森正人）